

平成 30 年 5 月 8 日現在

機関番号：32663

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K16852

研究課題名(和文) インドの自治構想と第一次世界大戦： 帝國的相互作用 と 植民地間連動 の視点から

研究課題名(英文) The First World War and Nationalism in India: Imperial Interaction and Colonial Connection

研究代表者

上田 知亮 (UEDA, Tomoaki)

東洋大学・法学部・准教授

研究者番号：20402943

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題の目的は、欧米中心史観で研究されてきた第一次世界大戦の世界史的意義をインド史の観点から検証するため、第一次世界大戦がインド/南アジア地域の植民地ナショナリズムに与えた影響を解明することである。

本研究課題を通じて、第一次世界大戦が勃発した1914年から1930年代初頭までのインドの政治動向に関する新聞・雑誌記事を中心として数多くの資料を収集することができた。研究成果については、『東アジアと第一次世界大戦』と東洋文庫欧文紀要(Memoirs of Research Department of the Toyo Bunko)に寄稿した2本の論文が2018年度中に公表される予定である。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to examine the influence of the First World War over colonial nationalism in India/South Asia and finally to consider from the Indian point of view the global significance of the Great War, previously often seen from West-centric views.

This study enabled the researcher to collect in the United Kingdom as well as in India a great number of materials on colonial nationalism and the British Empire, including articles of newspapers and journals concerning Indian politics from 1914, when the War broke out, to 1931, the date of death of Motilal Nehru. The research outcomes include a chapter in the book "East Asia and the First World War" (Minervashobo, Japan) and an article in "Memoirs of Research Department of the Toyo Bunko" (Toyo Bunko, Japan), both of which will be published by March 2019.

研究分野：インド政治

キーワード：インド イギリス帝国 第一次世界大戦 ナショナリズム 植民地

1. 研究開始当初の背景

(1) 第一次世界大戦研究の動向

第一次世界大戦に関する研究は、2014 年で開戦 100 周年となることもあり、近年とりわけ活発に刊行されている。だが第一次世界大戦研究の多くは主戦場となったヨーロッパと、大戦を経てイギリスに代わる覇権国への道を歩み始めたアメリカ、そして大戦中に革命を経験して共産主義国家となったロシア／ソ連に関心を集中させている。換言すれば、欧米以外の地域に大戦が及ぼした影響は依然として十分に研究されていない。とりわけアジアには第一次世界大戦が現代につながる画期となった国・地域が少なくないにも拘らず、アジアが第一次世界大戦とどのように関わったか、大戦がアジアにどのような遺産を残したのかを検証した研究は、海外のものを含めても甚だ限られている。3 巻から成る大部の *The Cambridge History of the First World War (2014)* でさえアジアへの言及は極めて僅かであり、インドもその例外ではない。

他方、日本における第一次世界大戦研究は欧米と比較すると低調であると言わざるを得ない。そのなかで特筆すべき成果は『現代の起点 第一次世界大戦』全 4 巻(岩波書店、2014 年)と「レクチャー 第一次世界大戦を考える」シリーズ(人文書院、2010 年から続刊中 [既刊 11 冊])であるが、これらはいずれも社会史・文化史に重きを置いており、インドなどアジアの政治・外交・国際関係に大戦が及ぼした影響に関する分析は相対的に手薄である。

(2) インド史研究の動向

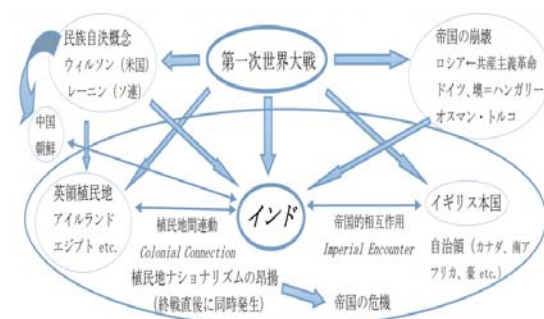
第一次世界大戦を説明変数(独立変数)に位置づける本研究課題の分析視角は、従来のインド／南アジア史研究において等閑視されてきた側面を照らし出すものである。確かに植民地期のインド／南アジア史に関する研究において第一次世界大戦への言及が皆無という訳ではない。植民地インドはイギリス帝国の要石の一つであり、大量の人的・物的資源を提供して大戦に深く関与し、宗主国イギリスの戦争継続と勝利に重大な貢献を果たしたことはしばしば言及されることである。さらに、大戦終結直後に M・K・ガンディーの主導するナショナリズム運動が盛り上がり、英印関係が急速に悪化したこと自体は数多くの研究が指摘している。

だが従来の研究は、大戦中に 22 年間の南アフリカでの活動を終えてインドに帰国したばかりのガンディー個人の思想と運動手法の新奇さを重視するあまり、当時のインド国民会議派内部の権力関係を軽視する傾向にある。こうした「ガンディー中心史観」からの脱却(「ガンディー神話」の解体)がインド近代史研究の重大な課題となっている。

インド近代史研究のもう 1 つの重要課題は、

一国史(インド史)および南アジア史からの脱却である。地域横断的な視点から、イギリス本国との相互作用(Imperial Encounter)や、他の英領植民地(特に第一次世界大戦直後に独立を達成したエジプトとアイルランド)との間の相互認識・思想連鎖・政治連鎖(Colonial Connection)を歴史分析に組み込んでグローバル・ヒストリーと「世界史」を構築していくことが求められている。これは最先端のイギリス帝国史研究が現在取り組んでいる課題でもある。

さらに、帝国内自治領から完全独立(purna swaraj)へと政治目標が変化する画期となった第一次世界大戦を「現代インドの起点」とみる本研究は、近現代史の長期的・統合的理解を試みるものであり、現代インド研究へのフィードバックもその目的の 1 つである。



2. 研究の目的

本研究課題の目的は、第一次世界大戦がインド／南アジア地域の植民地ナショナリズムに与えた影響を解明することである。(a) インド人政治指導者の自治構想とイギリス帝国観の変容、(b) イギリス本国における帝国政策の変化とインド統治政策の相互作用(Imperial Encounter)、(c) 英領植民地－インド間の相互認識・思想連鎖・政治連鎖(Colonial Connection)、という 3 つの側面から分析することを通じて、欧米中心史観で研究されてきた第一次世界大戦の世界史的意義をインド史の観点から検証するとともに、インド・ナショナリズムの特質を国際比較により導き出す。

より具体的に述べると、(a) 欧米偏重の第一次世界大戦研究にインド／南アジア史研究から重大な貢献を果たす、(b) 大戦以降のインドのナショナリズム運動におけるガンディーの役割を相対化してインド政治史を重層的に捉える新たな視点を提供する、(c) 一国史・地域史を超えてイギリス帝国史およびグローバル・ヒストリーのなかに植民地インドを位置づける、という 3 点が本研究課題の目的である。

こうした研究課題の遂行を通じて、第一次世界大戦に起因する政治的変動と脱植民地化の進展に関する世界最先端の学術的知見が生み出されるだけでなく、植民地ナショナ

リズム研究全般に対しても理論的・方法的な側面で重要な貢献を果たすことが目指される。さらに2017年がインド独立70周年に、2018年が第一次大戦終戦100周年にあたることから、学術的・社会的ニーズは高いと考えられる。「現代インドの起点」に関する本研究の社会的意義は、日本におけるインド／南アジア理解の深化に対する歴史学からの貢献という意味でも極めて重大である。

3. 研究の方法

既存の第一次世界大戦研究における欧米偏重とアジア軽視の欠落を補うとともに、インド近代史研究における「ガンディー中心史観」の限界を克服するため、大戦当時の植民地インドにおいてガンディー以上の権力基盤と影響力を誇っていたインド人政治指導層の思想と運動が第一次大戦を契機にどのように変化したのかを、そのイギリス帝国観および国際秩序観（国際連盟や委任統治制度、民族自決原則への見方がその一例）とそれに基づく自治構想を中心に実証的に解明する。

さらに現在の国境と地域区分を自明の前提とする一国史・地域史に陥ることを回避すべく、イギリス本国とインド、そして他の英領植民地それぞれの政治動向の相互作用と思想連鎖を視野に入れ、本国政府の帝国政策の変化やエジプトとアイルランドの独立が植民地インドのナショナリズムに及ぼした影響を一次資料に基づき検討する。なお「イギリス帝国」という枠組みを相対化するとともにその特質を把握するため、同じく大戦終結直後に反植民地主義ナショナリズム運動が抬頭した朝鮮と中国の事例のインドへの影響も並行して検証する。

より具体的には、第一次世界大戦当時のインド国民会議派およびナショナリズム運動において、北インドの連合州を地盤としてガンディー以上の影響力を誇っていたモーターラール・ネール（ジャワーハルラール・ネールの父）の思想と運動が大戦を契機にどのように変化したのかを中心に研究を進めた。さらに、研究対象を急進派インド人政治指導者（B・G・ティラク、L・L・ラーイ、B・P・パール）の思想と運動に対する第一次大戦の影響にも拡張し、M・ネールならびにJ・ネールと比較分析する。

それに加えて、現在の国境と地域区分を自明の前提とする一国史・地域史に陥ることを回避すべく、イギリス本国とインド、そして他の英領植民地それぞれの政治動向の相互作用と思想連鎖を視野に入れ、本国政府の帝国政策の変化やエジプトとアイルランドの独立が植民地インドのナショナリズムに及ぼした影響の検討も試みた。なお「イギリス帝国」という枠組みを相対化するとともにその特質を把握するため、同じく大戦終結直後に反植民地主義ナショナリズム運動が抬頭した朝鮮と中国の事例のインドへの影響も

並行して検証することを目指した。

こうした研究を遂行するにあたり、資料収集を連合王国（UK）・ロンドンの大英図書館（the British Library）やインド・デリーのネール記念博物・図書館（Nehru Memorial Museum and Library）などで実施し、第一次世界大戦が勃発した1914年から、M・ネールが死去した1931年までのインドの政治動向に関する新聞・雑誌記事や、日本国内ではアクセスが困難な文献を中心として数多くの資料を収集した。

4. 研究成果

上述した通り、第一次世界大戦に関する研究には枚挙に暇がないほどである一方で、アジアが第一次世界大戦とどのように関わったか、大戦がアジアにどのような影響を及ぼしたのかを検証した研究は、海外のものを含めても甚だ限られている。とりわけ、インドと第一次世界大戦との関連に関して言うと、戦場においてインド軍が果たした役割を分析した研究が多いのに対して、植民地インドの国内政治、とりわけナショナリズム運動への影響に関する分析はかなり手薄である。

こうした国内外の研究状況において、M・G・ラーナデーやG・K・ゴーカーレー、M・K・ガンディー、J・ネールと比較しつつ、M・ネールのナショナリズム思想の変遷を分析した論文を執筆し、アジア（特に東アジア）と第一次世界大戦との関連を政治・外交を中心に検討した論文集（奈良岡聰智（編）『東アジアと第一次世界大戦』ミネルヴァ書房、2018年度に刊行予定）に寄稿したことは、日本における第一次世界大戦研究ならびにインド研究の進展に少なからぬ寄与を果たすものと考えられる。

さらに英語論文による研究成果の国際的発信についても、東洋文庫欧文紀要（*Memoirs of Research Department of the Toyo Bunko*）に寄稿し、こちらも2018年度中に公刊される予定である。日本において東洋史研究を主導している研究機関の一つである東洋文庫の欧文紀要で研究成果を公表することにより、日本におけるインド史研究ならびに第一次世界大戦研究の水準の高さの一端を国際的に示すことができると考えられる。

M・ネール以外のインド人政治指導者のナショナリズム思想と自治構想や、アイルランドやエジプトといったイギリス帝国内植民地およびそれ以外の朝鮮、中国におけるナショナリズム運動・思想との比較分析については、今後成果を公表していくことを期す。

それに加えて、研究計画時点では想定していなかったものの、研究期間中に収集した資料の読解を進めるなかで見出された、1920年代の植民地インドの政治指導層に強い影響を及ぼしたのではないかとと思われる要因についても、今後研究に着手していく予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2件)

- ① Tomoaki UEDA, “Colonial Indian Nationalists on the British Empire before and after the World War I”, *Memoirs of Research Department of the Toyo Bunko*, No. 76, 2018(forthcoming), 頁数未定、査読無
- ② 上田知亮 「アジア通貨危機と核実験：1990年代インド政治の継続性」『東洋法学』第59巻第2号、15-40頁、2016年、査読無

[学会発表] (計 4件)

- ① 上田知亮 「西ベンガル州におけるゴルカランド運動と言語問題」、インド州政治研究会、2018年
- ② 上田知亮 「インドにおける汚職取締法制と汚職撲滅運動」、汚職撲滅のパラドクス研究会、2017年
- ③ 上田知亮 「西ベンガル州における選挙と政党政治」、インド州政治研究会、2016年
- ④ 上田知亮 「インドにおける判事任命制度改革の動向」、政治の司法化研究会、2016年

[図書] (計 3件)

- ① 上田知亮 『東アジアと第一次世界大戦』(共著) ミネルヴァ書房、頁数未定、2018年(出版予定)
- ② 上田知亮 『インド文化事典』丸善出版、30-31、280-281頁、2018年
- ③ 上田知亮 『政治の司法化と民主化』晃洋書房、161-188頁、2017年

6. 研究組織

(1) 研究代表者

上田 知亮 (UEDA Tomoaki)
東洋大学・法学部・准教授
研究者番号：20402943